

「ぐうちゃんに対する僕の気持ち
を読み取ってほしいところですよ。
どんな気持ちかを右に書きこもう。」

もっと線を引いて気持ちを
読み取るの書き込みをしよう。
取った人もいいと思えます。
自分の読みとりも大切に生かそう。

ぐうちゃんの話はおもしろいが、大げさな感想は
その日も、夕食の後に僕はぐうちゃんの部屋でほら話を聞いていた。

↑プラス

0

↓マイナス

「悠君。世界でいちばん長い蛇は何だか知っているか。」

「ぐうちゃんは、細い目をめいっぱい見開くようにして僕に話をする。それは、いつもおもしろい話をするときのぐうちゃんの癖で、だから、僕はぐうちゃんのその表情が好きだ。でも、今日は話のテーマがちょっと幼稚すぎる。とはいえ、宿題するよりは、ずっとおもしろそうだから、母に見つかるとその話を聞いていることにした。」

「アナコンダとかいうやつだね。アフリカの密林あたりにいる。」

「悠君は地理に弱いんだなあ。アナコンダがいるのはアマゾンだよ。現地の人にはスクリージュとよんでいて、これはポルトガル語で水蛇という意味だ。長く太くなりすぎて蛇行するには地球の重力が負担になって水に入ったんだ。」

「泳いでいて出会ったら嫌だな。飲み込まれちゃいそうだな。」

「そう。本当に人間なんか簡単に飲み込んでしまう。生きてる馬だって飲み込んでしまうぞ。」

「ぐうちゃんの話はいつも怪しい。僕がおもしろがればいいと思ってるのだ。」

「そんなのうそだろ。だって馬の背は人間よりはるかに高いし、体重だって普通五百キロはあるって何かの本で読んだよ。アナコンダがいくら大きいといってもそんな大きな口は開けられないだろ。ありえねえ。」

「ありえねえなんだよ。」

「ぐうちゃんは変な言い方をした。」

「立っている馬をそのまま大口を開けて飲み込むわけじゃないんだ。まず馬の首のあたりにかみついて馬をひっくり返す。それから馬の体に巻き付いて馬の脚の骨をバキバキ折っていく。飲み込みやすいように全体を丸くしていくんだなあ。それから、ゆっくり、飲んでいくんだ。」

「本当かなあ。カのカもった話し方を聞いていると、うっかりぐうちゃんのほら話の世界に取り込まれてしまいそうになる。でもその怪しさがやっぱりおもしろい。悠君。アマゾンの動物はみんな大きいんだ。ナマズもでっかいのがいるぞ。どのくらいだと思う？」

「どうせほら話だから僕も大きく出ることになった。」

「そうだね。じゃーメートル！」

「ブブー。」

「外れの合図らしいけど、まるっきり子供扱いだ。」

「アマゾンでは普通に三メートルのナマズがいるよ。」

「うそだあ。ありえねえ。」

「さすがに頭にきた。僕を小学生ぐらいと勘違いしているんだ。」

「うそじゃないよ。口の大きさがメートルぐらいだよ。」

「ぐうちゃんはまた細かい目になった。僕をからかって喜んでる目だ。」

「ふうん。」

「なんだかばかしくなったので気の悪い返事をした。」

「あ、信じてないだろう。じゃあがらっと変わって、きれいで小さい宇宙の話をしてようか。」

「ぐうちゃんは話の作戦を変えてきた。宇宙の話は好きだ。例えば宇宙には果てがあるのか、とか二重太陽のある星の話とかだ。ところが、ぐうちゃんの話は、地球の中の宇宙の話だった。」

「北極には、一年に一度流水が解けるときに小さな氷の惑星ができるってイヌイットの間ではいわれている。アイスプラネットだ。めったに現れないので、それを見た者はその年いいことがいっぱいあるといわれている。」

「童話か何かの話？」

「いや、本当にある話だよ。見ることできた者を幸せにするという、地球の中にある小さな小さな美しい氷の惑星。いい話だろ。」

「やっぱりありえねえ。俺、風呂の時間だし。」

「ぐうちゃんは続けて話したそうだったけれど、母親が風呂に入ると大きい声で呼んだので、それを口実に逃げることにした。ぐうちゃんは、やっぱり今どきの中学生をなめているのだ。」

三日、学校に行く途中で、同じクラスの吉井と今村に会った。初めはどうしようかと思ったけど、馬も飲んでしまっつかいアナコンダや、三メートルもあるナマズの話はおもしろかったし、氷の惑星の話も、本当だったらきれいだろうなと思ったから、つい吉井や今村にその話をしてしまった。二人は僕の話が終わると顔を見合わせて、「ありえねえ。」「証拠見せるよ。」と言った。「そんなほら話、小学生でも信じないぞ。」そう言われればそうだから、部活が終わって大急ぎで家に帰ると、僕は真っ先にぐうちゃんの部屋に行つて、「昨日の話、本当なら証拠の写真を見せるよ。」と無愛想に言った。ぐうちゃんは少し考えるしぐさをして、「そうだなあ。」と言って、目をパチパチさせている。

「これまで撮ってきた写真をそろそろちゃんと整理して紙焼きにしないと、と思っっているんだ。そうしたらいろいろ見せてあげるよ。」むっとした。そんな言い逃れをするぐうちゃんは好きではない。なんかぐうちゃんに僕の人生が全面的にからかわれた感じだ。吉井や今村に話をした分だけ損をした。いや失敗した。僕までほら吹きになってしまったのだ。

それから夏休みになってすぐ、ぐうちゃんはいつもし少し長い仕事に出た。関東地方の各地の川の測量をするということだった。僕は人生を全面的にからかわれて以来、あまりぐうちゃんの部屋に行かなくなっていたから、気にも留めなかった。

夏休みも終わり近く、いつものように週末に帰ってきた父と母が話しているのが、風呂場にいる僕の耳にも入ってきた。

「僕たちは、都市のビルの中にいるからなかなか気がつかないけど、由起夫君は若い頃に世界のあちこちへ行っていたから、日本の中にいたら気がつかないことがいっぱい見えているんだろね。なんだか羨ましいような気がするな。」

母は、珍しくビールでも飲んだらしく、いつもよりもっと強烈に雄弁になっている。

「あなたは何をのんきなことを言っているの。由起夫が、いつまでもああやって気ままな暮らしをしているのを見ると、悠太に悪い影響が出ない心配でしかたがないのよ。例えば極端な話、大人になっても毎日働かなくてもいいんだ、なんて思っただけで勉強の意欲をなくしていったとしたら、どう責任取ってくれるのかしら。」

父が何かを答えているようだったが、はつきりとは聞こえなかった。ただ、僕のことぐうちゃんが責められるのは少し違う気がする。そう思うと、電気の消えたぐうちゃんの部屋が急に寂しく感じられてきた。

四 それから、ぐうちゃんがまた僕の家に帰ってきたのは、九月の新学期が始まってしばらくした頃だった。顔と手足が真っ黒になっていて、パンツ一つになると、どうしても笑いたくなって困った。

残暑が厳しい日だった。久しぶりにぐうちゃんの話が聞きたいと思った。またからかわれてもいい。暑いから、今度は寒い国の話が聞きたい感じだ。ところが、ぐうちゃんの話は、でっかい動物のでも、暑い国の中でも、寒い国の話でもなかった。

「旅費がたまったから、これからまた外国をふらふらしてくるよ。」

ぐうちゃんは突然そう言った。「でもまあもう少し。」にはこんな意味があったのか。ぐうちゃんはいつもと変わらずに話を続けている。それなのに、ぐうちゃんの声はどんどん遠くなっていく。気がつくくと、僕はぶっきらぼうに言っていた。

「勝手に行けばいいじゃないか。」

ぐうちゃんは、そのときちょっと驚いた表情をした。何かを話しかけようとするぐうちゃんを残して僕は部屋を出た。

それ以来、僕は二度とぐうちゃんの部屋には行かなかった。母は、そんな僕たちに、あきれたり慌てたりしていたけれど、父は何も言わなかった。十月の初めに、ぐうちゃんは小さな旅支度をして「いそろう」を卒業してしまった。

出発の日、僕は、何て言っているのかわからなままぐうちゃんの前立っていた。ぐうちゃんは僕に近づき、あの表情で笑った。そして、何も言わずに僕の手を握りしめ、力の籠もった強い握手をして、大股で僕の家を出ていった。

「ほらばっかりだったじゃないか。」

「いそろう」がいなくなりましたった部屋の前で、僕はそう思った。

五 ぐうちゃんから外国のちよつとしゃれた封筒で僕に手紙が届いたのは、それから四か月ぐらいたってからだだった。珍しい切手がいっぱい貼ってあった。

「あのときの話の続きだ。以前若い頃に、北極まで行ってイヌイットと暮らしていたことがあるんだ。そのとき、アイスプラネットを見に行こう、と友達になったイヌイットに言われてカヌーで北極海に出た。アイスプラネット。わかるだろう。氷の惑星だ。それが北極海に本当に浮かんでいたんだ。きれいだったよ。厳しい自然に生きてる人だけが目にできる、もう一つの宇宙なんだな、と思ったよ。地上十階建てのビルぐらいの高さなんだ。そして、海の中の氷は、もっともつとでっかい。悠君にもいつか見てほしい。若いうちに勉強をたくさんして、いっぱい本を読んで、いっぱい『不思議アタマ』になって世界に出かけていくとおもしろいぞ。世界は、楽しいこと、悲しいこと、美しいことで満ち満ちている。誰もが一生懸命生きていく。それこそありえないほどだ。それを自分の目で確かめてほしいんだ。」

手紙には、ぐうちゃんのカ強い文字がぎっしり詰まっていた。

そして、封筒からは写真が二枚出てきた。一枚は人間の倍ぐらいいあるでっかいナマズの写真。もう一枚は、北極の海に浮かぶ、見た者を幸せにするという氷の惑星の写真だった。